

ゴールデンルール

副校長 佐藤 多佳子

以前朝会で、「ゴールデンルール」の話をしました。「ゴールデンルール」とは、「自分がされて嫌なことは人にしない。自分がしてほしいと思うことを人にしてあげよう。」という大人にも子どもにも通用する大切なルールのことです。学校生活では、いろいろな決まりの中で子どもたちは過ごしています。しかし、全ての事柄を決まりで表すことはできません。それぞれが考えて行動することが大事です。そのときの基準になるものが「ゴールデンルール」です。

夏休みの始めに、地域の方からこんな話を聞きました。「駅から歩いて帰ってきていたときのこと、後ろから来た子たちに体のことを言われ笑われて、とても嫌な気持ちでした。どこの学校の子かわからないけれど、人を不快にすること、傷つける言動をとることはやめてほしい。」と言うのです。

朝会で話したのも、体のことで悩んでいた私の友達のことでした。その友達は、モデルのように背が高く、みんなからはうらやましがられていましたが、本人は、背の順並びではいつも一番後ろ、頭一つ飛び出して目立つ、そんな背が高いことをとても気にしていました。「背が高くてうらやましい。」と人から言われることが嫌で嫌でたまりませんでした。周りは意地悪をしているつもりはありませんが、彼女にとっては苦痛だったのです。周りの人はそのことがわかりませんから、そういうときは「私は嫌だ。」とはっきり言わずには気持ちが悪くありません。そして、言われた人は、相手が嫌だと言うことをすぐにやめなくてははいけません。自分がいいと思っても相手が嫌なこともあるのです。考え方や感じ方は十人十色、友達はどうしてほしいのだろう、自分はどう行動したらよいのだろうと迷うとき、「私だったらこうしてもらえたらうれしいな。こんなことをされたらいやだな。」と自分に置き換えて考えてみるのです。相手が望むことと多少違っていても誠意は伝わるはずです。いやなことを言ったりしてしまっただけでけんかになることがあります。「自分だったら」と想像力を働かせて、みんなが気持ちよく過ごせるようにしていきたいものです。学校では、大勢の子どもたちが集団生活を送る中で、人との関わり方、友達と協力することの大切さを学んでいます。算数や国語、理科、社会等の知識は一人で勉強しても獲得することはできます。でも、人との関わり方を学び、豊かな人間関係を育むことは一人でできません。協力して何かを成し遂げたときの充実感、達成感を味わえるのは、大勢の子どもたちが生活する学校だからできることなのです。

夏休みに様々な経験をして一回り大きくなった子どもたち、それぞれのやさしさと友達とよい関係を築いていってほしいと思います。